

内陸文化交流室活動報告

(付「内陸文化交流室の活動について」)

平成15年度

3月

松本広域観光フォーラム2004の開催（於松本市中央公民館）。人文学部とアルプスの風ツアー推進会議、松本広域連合との共同開催。企画、運営に参加。

講演会 二村宏志「地域ブランドの時代」

研究報告 NPO 法人信州・大学地域連携プロジェクト

「マーケティング手法を用いた広域観光ルート開発」

平成16年度

4月

平成13年度に開始した松本広域連合との共同研究「松本広域圏内の地域観光資源についての調査・研究」を引き続き実施。

6月

アルプスの風ツアー推進会議・松本地域広域観光企画研究会開催。共同研究「松本広域圏内の地域観光資源についての調査・研究」においてすすめてきた、地域観光資源発掘調査、及び商品化調査研究事業のうち、地域観光資源発掘調査は昨年度で終了した。昨年度分の共同研究の成果として、アルプスの風ツアー推進会議『平成15年度地域の観光資源発掘調査研究報告書』が発行された。

内陸文化交流室幹事会を開催。新たな事業として、人文学部内から地域と連携して調査、研究を募集、支援し、あわせてその成果を発信して行く「地域価値創造研究プロジェクト」を行うことを決める。

7月

「地域価値創造研究プロジェクト」を学部内で応募。応募については以下の通り。応募の中から、渡辺勉、大串潤児、渡辺匡一、井出万秀、山田健三の合計五件の研究に、総額四〇万円での研究支援を行うこととした。

研究責任者	研究題目
渡 邊 勉	飯山市の産業に関する調査研究
大 串 潤 児	穂高町の文化運動についての基礎研究
大 串 潤 児	穂高町をフィールドとした近現代資料研究
渡 辺 匡 一	近世期、筑北地域における修験道の研究
渡 辺 匡 一	信州における木地師の研究
渡 辺 匡 一	中・近世期、諏訪地域における学問交流の研究
井 出 万 秀	ヘルベルト・ツァハルト教授関係資料の整理
山 田 健 三	木曾定勝寺蔵大般若経音義に関する基礎的研究
和 田 敦 彦	長野県の戦時期強制労働に関する調査研究
和 田 敦 彦	長野県近代登山、山岳関係資料研究

和田 敦彦	絵はがき資料に基づく信州像調査
中嶋 聞多	地域ブランド研究の動向に関する文献研究

10月

信州大学地域連携フォーラム2004を開催（於信州大学経済学部第一講義室）。

テーマ 国立大学法人化後の新たな連携の可能性

人文学部の推進する地域連携事業として、これまでの内陸文化交流室の活動を「内陸文化交流室の活動について」（別添）として提示。

11月

内陸文化交流室幹事会開催。人文学部中期計画における内陸文化交流室の組織刷新を視野に入れ、幹事の増員を行った。新たな幹事として吉田正明、赤川学の2名を加え、内陸文化交流室業務の整備をはかることとした。

また、名称については、「人文学部地域連携支援センター」とすることとした。あわせて、地域連携支援センター室を整備することとなった。

2月

『内陸文化研究』第4号を発行。

内陸文化交流室の活動について

- 1 設置に至る経緯
- 2 主たる活動
 - 2・1 地域の価値を生かしてゆくための共同研究の推進
 - 2・2 人文学的知見を生かした地域連携事業の開発
 - 2・3 信州地域、あるいは内陸文化に関するシンポジウム、講演会の開催
 - 2・4 機関誌、及び研究成果の発行
- 3 今後の活動

1 設置に至る経緯

内陸文化交流室は、平成12年4月より学部内措置として設置された。設置の趣旨は、信州大学の地の利を活かして、人文学部の研究教育面での個性化をはかりながら、同時に地域社会との連携を進めていくことにあった。「内陸文化」という言葉は一般性をもっているとは言い難かったが、信州をフィールドとして行う文化研究、社会研究に普遍的な方向付けを与え、国内他地域との比較、国際比較を可能にする場を設定したいと考えたからである。信州という地域を手がかりとしながら、市民と信州大学、そして信州大学と他大学との、様々な交流のもとに、あらたな研究、教育を展開してゆくねらいをもっている。

その組織は、2年任期の内陸文化交流室幹事2名と学部長、及び評議員がそれに加わる形で成り立っている。

2 主たる活動

2・1 地域の価値を生かしてゆくための共同研究の推進

地域との共同研究の窓口としての活動が、内陸文化交流室が果たしてきたもっとも大きな役割の一つである。つまり自治体や民間企業からの共同研究、共同事業を受付け、あるいはこちらからプロジェクトを企画、呼びかけることを通して、ネットワークを構築し、大学と民間との間で協力しあい、互いの長所を生かしながら新たな研究を創造して行くと共に、その成果を大学の外へ、地域へとうまく還元してゆくために活動してきている。

具体的には平成13年度より松本広域連合、アルプスの風ツアー推進会議と人文学部とで実施してきた「松本広域圏内の地域観光資源についての調査・研究」をあげることができる。NPOの信州・大学地域連携プロジェクトと連携をはかりながら、人文学部の多くの教員が共同研究に参画し、地域の観光資源を、歴史、文化、言語といった多様な観点から掘り出し、具体的な観光資源を発掘し、さらには観光ルートとして提案してゆく事業である。

年度ごとに、様々な人材を招いて、市民に向けてフォーラムを開催し、地域との共生関係の中で、創造的な地域イメージを形づくってゆく、エコツーリズムへの関心のもと、信州や地域の観光や産

業についての多様な観点から講演、シンポジウムを開催し、成果をあげている。

また、地域観光資源発掘調査という形で、複数のプロジェクトが、地域における文化的な資源を発見、整理、保存する活動を継続的に行っている。そうした観光資源の素材を、歴史、文化的視点から調査する一方、商品化調査研究事業として、あらたな観光ルート創出のために、具体的なルート案を作成、さらにはその企画、立案そのものを効果的に行うマーケティングの手法を含めて、信州大学地域連携プロジェクト（NPO）を介在させながら、研究会を開催し、実際のルート提案を行ってきている。

平成16年5月には、あらたな地域との連携事業として、穂高町と信州大学人文学部との間で連携協定が結ばれた。この事業は、町役場側がインターンシップの受け入れや研修施設の提供といった協力を大学側にする一方、大学側が、穂高という町をフィールドとして、教育、研究をすすめ、穂高町にその成果を還元しながら、文化、教育、学術面で助け合ってゆく、大学と地域との新たな文化的な事業である。主な活動はこれからだが、その中での企画やコーディネートにおいて、大学側では内陸文化交流室が活動している。

また、平成16年度より、信州という地域の価値と独自性を発見、創造し、それらを教育や研究素材として活用してゆくことをねらいとした研究や調査を人文学部を中心に募集、支援する「地域価値創造研究プロジェクト」を開始。地域と連携した研究を進めてきた、あるいは進めようとする教員の活動を経済的にバックアップするとともに、その成果を『内陸文化研究』に発表できるよう活動している。

2・2 人文学的知見を生かした地域連携事業の開発

内陸文化交流室は、地域企業との連携をも視野に入れて活動し、その窓口ともなっている。しかし、ただ産学連携事業を展開するのではなく、そこで、人文学という知見を、いかに生かしながら共同の事業を展開してゆくかを考えて活動している。その具体的な実現事例が、人文学部的な視点に立った企業研修の構想、実施である。これは平成15年1月に、5日間にわたって行われた信州大学人文学部との産学連携研修事業として実行された。グローバルな視野に立った次世代の人材育成をねらいとして、多様性や異文化に対する柔軟な理解力を養成する企業向け研修である。この研修は松本商工会議所・長野県経営者協会「中信支部」・信州大学人文学部との共同研究を基盤として、産学連携研修事業「グローバル人材育成のための異文化コミュニケーションとリーダーシップ」として実現した。その詳細は以下の通りである。事後の企業側からの反応もよく、高い評価を得ることができた。

- | | | |
|-----|------------------------------|------|
| 第1回 | 「効果的なコミュニケーションマネジメント」 | 近藤富英 |
| 第2回 | 「国際社会における異文化コミュニケーション」 | 坂口和寛 |
| 第3回 | 「英語と日本語、言語によるコミュニケーション・ギャップ」 | 花崎美紀 |
| 第4回 | 「日本型リーダーシップモデルの研究」 | 笹本正治 |
| 第5回 | 「中国市場に理解を深める」 | 久保亨 |

実際の研修では、単なる講義形式ではなくディスカッションや様々な視聴覚教材を用いた研修がなされ、内容もまた、国際理解や異文化理解に対する深い理解をめざすものとして企画されている。

こうした例からもわかるように、文化や言語を背景とした認識を生かしながら、地域企業との連携事業を構想してきている。

2・3 信州地域、あるいは内陸文化に関するシンポジウム、講演会の開催

共同研究や地域連携事業は、単に狭い領域で研究を進めているわけではない。学外の多様な分野から研究者を招き、また、自治体や民間の研究機関とも共同しながら、その成果を広く公開してゆくために、講演やシンポジウム、フォーラムを開催してきている。

内陸文化交流室発足の平成12年には、活動方針を含めて、研究の基礎的な方法や、活動の方向性をめぐって、シンポジウムを「内陸文化とは そのネットワークを探る」というテーマで開催している。

また、松本広域連合との共同研究「松本広域圏内の地域観光資源についての調査・研究」では、毎年、地域と観光について考えを深めるフォーラムを開き、市民の広い参加のもとで、講演やシンポジウムを開催している。主なテーマは以下の通りである。

内陸文化研究シンポジウム（平成12年11月 信州大学旭会館）

テーマ 内陸文化とは そのネットワークをさぐる

信州の観光フォーラム（平成13年2月 松本市中央公民館）

テーマ もてなしのこころとネットワークづくり

松本広域フォーラム2002（平成14年2月 松本市中央公民館）

テーマ 「信州」を生かす 環境と調和した観光地づくり

松本広域フォーラム2003（平成15年2月 松本市中央公民館）

テーマ エコツーリズムと広域観光

2・4 機関誌、及び研究成果の発行

内陸文化交流室では、平成14年度の設置依頼、上記の共同研究やシンポジウムの成果を、継続的に機関誌の形で発表してきた。機関誌『内陸文化研究』は、平成16年2月に第3号を発行した。以下は、掲載論文のタイトルの一覧である。

創刊号

第1回信州大学人文学部内陸文化研究シンポジウム—その開催趣旨と残された今後の課題
（佐倉由泰）

カリブ海地域における内陸文化—グローバル化のなかの差異（鈴木慎一郎）

内陸文化と信州の歴史（山本英二）

ネットワークという問題（中嶋聞多）

歴史学から見た内陸文化研究（笹本正治）

民間伝承の分布から見た内陸文化の性格（倉石忠彦）

“Land use System Transformation with the Development of Tourism and some Environmental Problems in Shinshu District, an Inland Area of Central Japan” (YO-

SHIDA, Takahiko)

農林業からみた内陸地域 (佐々木隆)

内陸地域の近代と産業形成 (村山研一)

第2号

近代初期における内陸地域の就業構造 —山梨県の事例 (村山研一)

松本の湧水と街造り —城下町から市街地再開発まで— (吉田隆彦)

信州における日本語教員養成 (沖 裕子)

幻灯画像史料の保存と活用について

—日本力行会蔵史料を中心として— (和田敦彦)

第3号

山村集落の世帯と農業

—飯山市小菅集落調査報告 第一報(1)— (村山研一)

山村における社会移動

—飯山市小菅集落調査報告 第一報(2)— (渡邊勉)

住民の意識から見る山村集落の現状と将来

—飯山市小菅集落調査報告 第一報(3)— (中原洪二郎)

地域調査における郵送法実査の現状と可能性

—回収率の分析を通して— (轟亮)

戦後長野県内における観光関係新聞 (一)

—『観光信州』『観光信州』『しなの観光民藝』— (大串潤児)

明治30年代登山関連記事目録

—「信濃毎日新聞」明治30年代前半期— (和田敦彦)

仏法紹隆寺覚え書き (渡辺匡一)

3 今後の活動

これまでに述べてきた、地域との連携の中で学際的な研究や調査を行い、そうした成果を研究、教育素材として生かし、外に向けて発信してゆくとともに、地域のためにそれらを還元してゆく活動は、これからの信州大学人文学部が、重点的に取り組んで行く目標となっている。人文学部は、現在中期目標として、この内陸文化交流室を機能、規模ともにより充実させ、「地域社会教育研究支援室」(仮称)とすることを掲げている。そのために、平成16年度中に組織の見直しをはかってゆく。

したがって、これまでの内陸文化交流室の実績の上に立ち、さらに充実した組織となって生まれ変わってゆくこととなる。

(2004/9/10 文責：内陸文化交流室 和田敦彦)